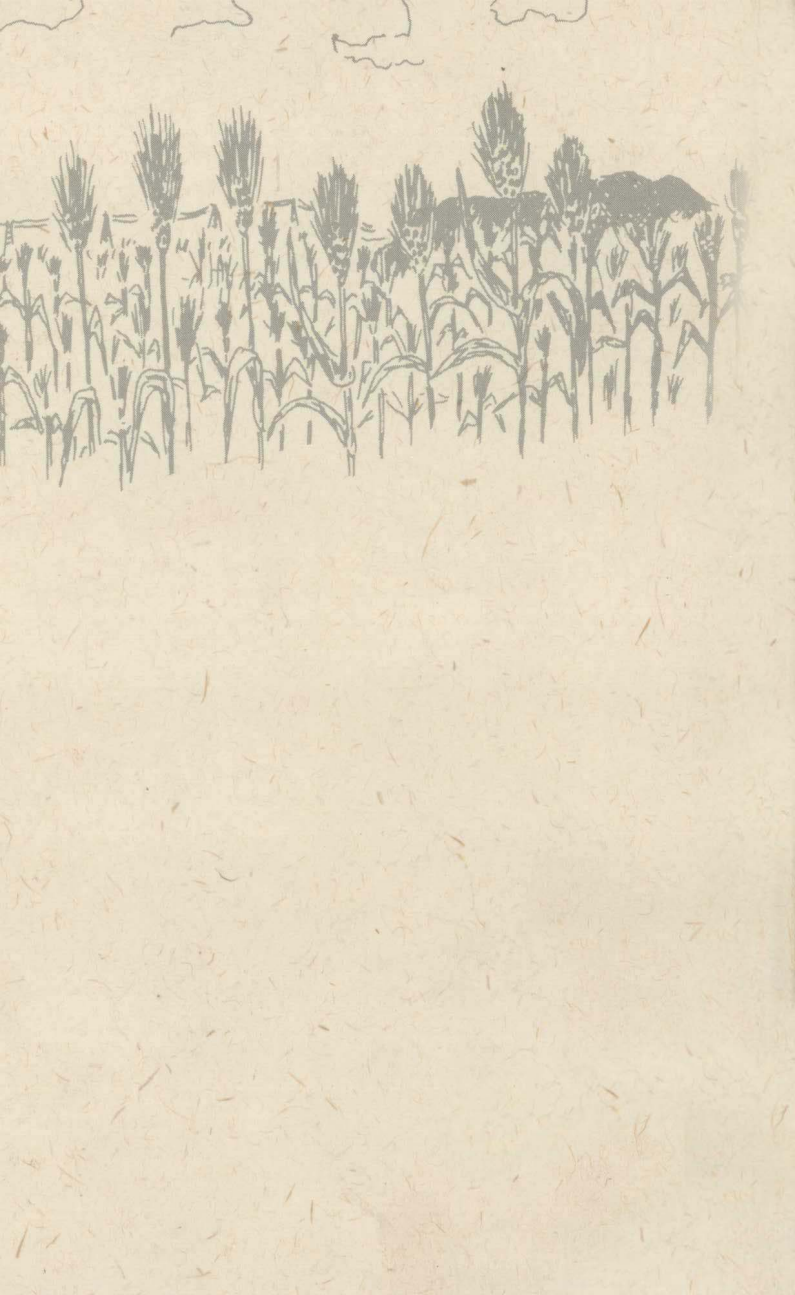




友の道



集英社

麦むぎの道みち

一九九六年一月三〇日 第一刷発行

著者 椎名 誠しいな まこと

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二五―一〇
郵便番号 一〇一―五〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六二〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 ナショナル製本協同組合

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

¥1200,-

麦の道
目次

麦の道

7

拳骨とソーセージ

31

新しい稽古着

53

汗みずく

75

熱風

97

あつい傷痕

119

間抜け騒動

141

草の海

遠い雲

犬の目

花の匂い

大作戦

あとがき

161

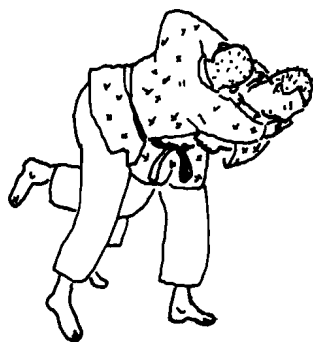
183

203

223

245

270



装丁 菊地信義

装画 沢野ひとし

麦
の
道

麦の道

市立羽賀高校に入った時、津田尚介は「まあいいやどうだって……」と思った。

担任の教師は加納玲子という、ひどく顔の大きな女性だった。高校で女の教師が担任になる、などということはまったく予想もしていなかったので、尚介はそれについても「まあいいやどうだって……」と思った。

加納玲子が、その偏平な顔に必要な以上に白粉おしろいを厚く塗って教室に現われた時、うしろの方の席で誰かが「ひひっ」と笑った。加納玲子は三十歳ぐらいで、カボチャの種に似た細い目がぐいんと攻撃的に吊り上っていた。

「私が一年間、きみたちのクラスの担任になるカノウです。この高校はまだ歴史はないけれど、その歴史をつまらきみたちがつくるわけですから、まあ精一杯頑張ってください」

加納玲子はまったく笑わない目で教室をひとわたり眺め回し、変にひとことずつ語尾に力を入れる喋り方をした。話している内容にあまり感情が籠っていないので、なんだかそれはひどく横柄に聞こえた。

一年はA組からF組まで6クラスあったが、女の担任は尚介のE組だけだった。

同じ組に尚介の中学出身者は女子が一人いるだけで、まわりにいる少年たちは尚介にとって全員その日が初対面だった。

「黒岩」という名札をつけた、いかにも悪そうな顔つきをした坊主頭が振り返り、斜めうしろの尚介の顔を見て「あまっこだぜ、先公せんこうはよ」と低い声で言った。

加納玲子が生徒に配るガリパン刷りの書類を職員室に取りに行っている間だった。

殆ど知らない顔ぶれ同士が集っていたが、そのちよっとした空き時間に、教室の中は早くもそれなりに騒々しくなっていた。

「どこの中学から来たね？」

と、黒岩は、年齢にしてはすこし濃すぎるぐらいの髭の剃り跡を片手でざりざり掻きながらさっきと同じぐらいの低い声で聞いた。

尚介は正直に答え、黒岩は自分の出身中学を言った。

市立羽賀高校は開校二年目を迎えたばかりで、尚介たちはその高校の二回生だった。上にはまだ二年生しかないのだ。

私立や県立高校の合格発表が終って一番最後にその高校の試験が行なわれたので、そこは一般に県下の落ちこぼれ生徒の救済校というように思われていた。新しい高校なので設備はまだまだに揃っておらず、急造の三階建校舎だけが田んぼの先の高台の上に建っていた。しかも二

年にわたって集ってきた生徒は予想していた数よりも多かつたらしく、急造の校舎にすべてのクラスは入りきらず、尚介のE組と隣のF組は、それ以前に建っていた中学校の古い木造校舎を使わねばならなかった。

尚介の入ったE組はオウド色をした木造モルタルづくりの建物の一階で、内側の壁は半月ほど前に塗ったと思われる白いペンキの臭いがまだ存分に残っていた。

尚介が狙っていた県立乙千代^{おちよ}高校は、仲のいい四人の友達と一緒に受け、尚介ともう一人が落ちた。その年完成したばかりのモダンな円形校舎が特に女生徒の人気を集めて競争率が高まった、という不利な状況もあったりしたが、自分が落ちたのを知った時、尚介はまあそんなものだろう、と思った。ほかの三人に較べて尚介の学力はやっと同じぐらいかやや劣る、といったあたりだろうと思っていたからだ。落ちたもう一人は東京の私立高校へ進み、尚介だけが羽賀高校へ入った。

E組には黒岩のほかに三、四人、いかにも悪そうな面がまえをした少年がいて、加納玲子がいからこのことを説明するために黒板に向いて背をみせると、一番最初に「ひひっ」と笑った男がやはり何度か同じように笑ってみせたし、一人はぐったりした挑発声で「先生もうそろそろおしまいにしようよ」などと、ねばついた声で言った。

「ひひっ」という笑い声を三度目にあげた時、加納玲子は黒板の手を休めて振り返り「いいかい、そんな態度ができるのもどっちみち今日だけだからね」と、口をいくら緊張させて引き

締め、早くも何人かの目ぼしをつけたらしい生徒の顔を順に睨みながら言った。

教科書を配ったり、学校生活のきまりや説明をするだけで第一日目は終わった。尚介の席は壁側の一番うしろだった。斜め前に黒岩がいた。尚介の前には顔に似合わない七・三分けをした唇の厚い男がいて、一度も振り返らなかつた。尚介の隣は石川という名のラッキョウ頭をした男で終始背筋をしゃんと伸ばして緊張していた。一クラス四十三人のうち女子が十三人いた。配られた教科書やプリント類を鞆に入れ、廊下に出ると同じ中学からやってきた竹本がすこし引きつったような笑顔を浮かべ、尚介に近づいてきた。尚介は竹本と中学時代それほど親しくしていたわけではなかつたが、こうしていかにも殺伐としたかんじの高校に來ると、同じ中学出身というのは妙に懐かしかった。

小柄な竹本は、新調した学生服の中になんだか全身で埋まりそうな恰好に見えた。「おたくはもうそのまま帰るの?」

と、竹本は大人のような口調で言った。

尚介は竹本の顔を見たときたん気持の底がホッと緩むような気がした。中学は中学で荒れていたのだけっして楽しい場所だとは思わなかつたが、この高校と較べたらずっと気持のやすらぐ場所のように思つた。

「もう帰っていいわけだろ?」

尚介はすこし自信のない声で聞いた。

「クラスによって違ふと思うけれど、こちらはこれから校庭に集るんだ。何をするのかかわからないけれど……」

真新しい鞆を女子学生のように胸の前に抱き、竹本はいくらか不安そうに言った。それから背のびして尚介の耳もとに口をよせ、「実はもうクラスの中で脅しあいがあったんだ。常浜中の連中がここにはだいぶ入ってきているみたいだ」と早口で言った。

常浜中は県下でも一番荒れて騒ぎのある中学として有名だった。工場コンビナートの誘致で海浜の埋立てが進み、漁業権と引き換えに大量の補償金が落ち、街そのものが騒々しい状況になっていた。

不安そうな竹本と別れて生徒通用口に向った。沢山の新生と擦れ違ったが、その殆どはごく普通の平凡で真面目な生徒のように思えた。

尚介のクラスもそうだったが、荒れてうるさそうなのはごく一部の生徒にすぎないのだ。

生徒通用口のところに角張った体の上にやはりごつごつと四角い顎をした長髪の教師が、青いトレーニングウェアの上下を着て立っていた。

教師は何も言わず、すこし顔を斜め上に向けながら黙って生徒たちを見ていた。尚介はなるべくその教師と目を合わせないようにした。なんとなく自分の中学の時の経験からその教師は生徒を殴るタイプの男だな、というのがわかったからだ。

校舎の建っている高台からゆっくり渦をほどこようにしてらせん状の坂道があった。まだ漸く勾配ができて、ローラーで踏み固めたばかり、というような状態だったが、校舎が高台にあるので、完成すればずいぶん洒落た道になりそうだった。そこを降りきるとすぐ下が県道で、バスの停留所があった。

国鉄の駅まで歩いて二十分ほどだった。はじめて受験のためにやってきた時、一緒に来た辻本が自分の時計でおそろしく正確に計っていたのだ。

尚介の中学から受験に来たのは男子七人、女子が三人だった。全員合格したのだが、男子のうち二人は改めてほかの私立に補欠で入ったようだった。

尚介たちは、この高校の入学試験にやってきた時、すでにちょっとした事件を起していた。午後の試験がはじまる前、校庭の隅で焚火をしたのだ。北風が吹いてあまりにも寒かったので、ごく自然にそういうことになった。尚介たちの町では冬、男たちが数人集るとわりあい簡単にすぐ焚火をして暖をとった。漁師町で、皆、浜に生活の中心を置いていたから広場の隅で火をおこすことなどなんのこともなかった。

でも十五、六歳の少年たちには場所や場合を冷静に考慮する力が欠けていた。

炎が上がり、ようやく手をかざせるかどうかというあたりで、早くも教師たちが何人か血相を変えて走ってきた。

眼鏡をかけ、半白の短い髪をした老教師は惘然として声もなく、ただもう尚介たちの顔を指